

## 平成19年度海外研修派遣報告

広島国際大学大学院 総合人間科学研究科

医療工学専攻 村中博幸

この度は海外派遣研修に参加させていただき有難うございました。スタンフォードは昼間は日差しが強くとても暑いですが、夜は涼しく過ごしやすい気候でした。海外研修は初めての経験で、語学力不足の私にとっては最初はとても不安でした。しかし、講義はすべて同時通訳され、講師の先生方のお話もリアルタイムで聞け、質問も自由にできました。セミナー初日は慣れない環境や時差ぼけの影響もあり、少し戸惑いましたが、講義の前に Dr. Moseley のコンテストと呼ばれるクイズ大会のお陰で、我々の緊張もほぐれました。毎朝これが楽しみの一つとなり、私も最終日にはやっと、スタンフォードの真っ赤なTシャツをゲットしました(写真)。Moseley先生はとても、フレンドリーな先生でセミナー全般のお世話をさせていただき、我々との距離も最も近い存在でした。

講義は CT、MRI、PET、3D、分子イメージングなど一般的な内容が多く感じましたが、とても分かりやすい内容でした。中でも、最終日の Dr. Gambhir の Molecular Imaging の講義はとても興味深い内容でした。FDG以外の今まで聞いた事のない核種を使った PET の動物実験データの紹介や光イメージングの新技術など日本ではあまり聞くことのできない内容です。とても残念だったのが楽しみにしていた 7.0TMR 装置が当日故障し、遠めに見るだけで終わった事です。

カリキュラムの中には病院実習もありました。米国では CT 操作室と撮影室が壁 1 枚で遮られ出入口ドアがないのには少し驚きました。被曝に対する考え方の違いでしょうか。技師の業務内容は日本と殆ど変わらず、放射線技師が血管確保ができる点が唯一違っているようでした。制度の違いもありますが、日本の技師の方がむしろ全般的には知識も技術も高いと感じました。4日目に米国の技師との意見交換会がありました。米国では X 線技師と言われる資格の上に CT や MRI、3D などの専門技師資格を置き、業務が細分化されているようです。この制度は専門性を極めるにはとても良いのですが、他のモダリティーの最新の知識が得られず、新しい発想や技術の応用ができない、他の部署との連携が難しいなどの様々な問題点があります。また、日本と米国との違いを知るには、もう少し病院実習の時間が必要だと感じました。言葉の問題はありますが、米国の技師とコミュニケーションを取ることで、もう少し深く理解できたのではないかと思います。特に、専門分野の方とお話しすると、お互いに得るものも多いと思います。

研修中、最も印象に残っているのは、最終日の Dr. Glazer の「放射線学の将来について」の話でした。先生のお話は最先端の技術のみにとらわれず、過去の技術を再確認し、現状の中から何かを見出すと言う逆の発想でした。我々は、いつも最先端技術の情報にとらわれて見失っている事が多くあります。私がこの研修で期待していた事も、MRI に関する先進的な最新技術の情報収集と新しい研究のテーマを見つけることでした。しかし、Glazer先生のお話を聞き、今後の研究に対する発想の転換ができました。

この研修は、臨床を経験しているものにとっては得るものが多く、モチベーションも上がります。我々放射線技師が、このような経験をすることは、日本の放射線技術の将来に貢献できる可能性を見出す良い機会だと思います。今後もこの海外研修を是非継続していただきたいと思います。

帰国する際、予定の飛行機が機長の体調不良により突如キャンセルされ結局、サンフランシスコ市内のホテルに一泊し翌日の帰国となりました。その際、空港スタッフとの交渉からホテルの手配まで、GE 横河メディカルの木村さんには本当にお世話になりました。私たちだけでは如何することもできない状況で大変助かりました。予想外の出来事でしたが、今になっては良い思い出になりました。

最後に、このような貴重な体験を与えてくださった日本放射線技術学会の関係者の皆様、GE 横河メディカルのスタッフの皆様方に心から感謝いたします。

修了証授与式にて Dr.Moseley との記念写真

(スタンフォードの真っ赤な T シャツ:筆者)

